

【vol.08】5番目の音と、トニックとルートの意味の違い

どうも、大沼です。

vol.07、07.5 と、二回に渡って『3rd』について学んできましたね。

『3rd』には、『M3rd(メジャーサード)』と『m3rd(マイナーサード)』の二種類がある、と言う事でした。

新しいことをやったので、ちょっと間を置きましたが、
どうでしょう？2つの3rdの位置、覚えられましたか？

ルート(もしくはトニック)に対して、指板上で、
どこにどの音があるのかを把握していることは超重要です。

これがわかっていないと、コード構成の仕組みも理解できないし、
音楽的にしっかりしたフレーズが弾けません(作れません)。

世界で名ギタリストと呼ばれている人達は、まず間違いなく全員が、
今やっているようなことの、(最低でも)基礎的な部分は把握しています。

いつかツイッターで、僕はこんなことをつぶやきました。

“プロのミュージシャンやアーティストがインタビューとかで時々言う、
『私は〇〇が出来ない(譜面が読めないとか)』は、信用してはいけない。
それは、『自分の納得する水準に達してない』と本人は思っているだけで、
普通の人10倍はできると思ったほうが良い。”

これ、結構リツイートされたんですが、
『わかります』と反応をくれたのは、
やっぱりプロの人(もしくはプロに近い人)が多かったです。

やっぱり皆さん、実感があるんでしょう。

名ギタリストの人達は「単に人よりギターが上手いだけのギターバカ」では

無いんですよ。

ちゃんと音楽家として、一般の人より、遥かに高い水準にいます。
(※稀に例外もいるかもしれませんが)

ちゃんと学び続けて、いつか自分自身がそういった領域に近づいた時、そのことを実感します。

今はまだ、半信半疑かもしれませんが、そうってから、音楽の本当に面白いところが分かってきます。

なぜなら、上のレベルの人たちが何を考えているのかが、自分にもだんだん理解できるようになってくるから。

例えばプロや、アマチュアでも上手い人達のライブで、アドリブとか、まあ、やっていることは何でも良いんですが、誰かがカッコいいプレイをすると、演奏者同士で顔を見合わせて「ニヤリ」みたいなシーンに遭遇することがあります。

これは、高レベルのプレイヤー同士で、『そのプレイ cool じゃん！』と言う感覚を共有できているから起こるんです。

でも、自分自身のプレイヤーとしてのレベルや、音楽的感性が低い場合、何が cool なのかがわかりませんよね。(気が付かないとも言える)

この講座は、音楽家に必要なものを身につけていき、それが分かるようになるための講座です。

しっかり学び続けて行って、あなたがそういったレベルに足を踏み入れた時、今まで死ぬほど聴いたと思っていた曲でも、まったくの別物に聴こえてくる時がきます。

そうなったら、リスニング(音楽を聴くこと)自体がものすごい快感になってくるのです。

アレも素晴らしい、コレも素晴らしい、と。

この快感を、文章で表現できないところが、とても歯がゆいのですが、やっていったらわかります。

あなたが学んだことが、どこかで使われていないか、積極的に探してください。

前にも言いましたが、受身でいる限り、成長はありません。
好きな曲、弾きたいと思った曲、どんどん弾いてくださいね。

別に最初は上手くいなくても良いんです。

というか、初めて弾く曲を一発で上手く弾けるならば、その人はプロレベルじゃないですか。

今は出来なくても、繰り返し練習していれば、気が付いたら出来るようになってますから。

それでは、前置きが長くなりましたが、Vol.8 やっていきましようか。

繰り返しになりますが、vol.7 と vol.7.5 では、2つの3rdの位置を覚えましたね。

今回は、vol7.5で行ったトレーニングフレーズを使って、もう1つ、音の名前と位置を把握します。

把握すべき音は、P5th(パーフェクトフィフス)と呼ばれる音。

なぜ、P5thと呼ぶのかについては今後やっていくので、今は深く考えなくてもOKです。

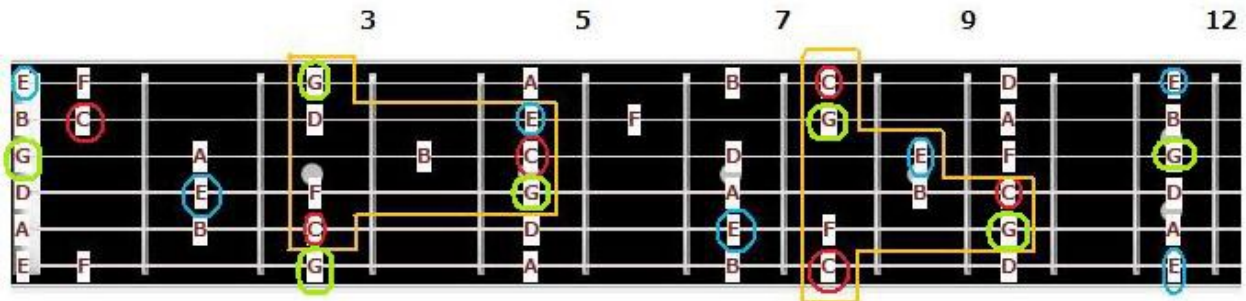
ルート(トニック)の位置から見て、
『ここにP5thがあるんだ』ということ把握してください。

譜例自体は前回とまったく同じなので、弾くのには苦労しないでしょう。

まずは M3rd の時の指板図を見てみましょう。

緑の四角で囲った場所が P5th にあたる音です。

今回は C(ド)音を基準に見ているので、P5th は G(ソ)音になります。



前回は 3rd の把握の為に譜例を練習しましたが、
今回は P5th を把握することを意識して練習します。

さて、前回、「トニック(1th)と 3rd の間には、ちゃんと 2nd がある」と言うようなことをお話しましたが、当然、3rd と 5th の間には 4th があります。

これも細かい理屈は後々解説しますので、なんとなく把握しておいてください。

では、前回と同じものですが、譜例は以下です。

S-Gt *mf*

4/4

1 2 3

4 5 6

7 8 9

10 11

TAB

次に、これと同じ事を m3rd の譜例でも行います。

3 5 7 9 12

G G# A# A# B B C C# D D# D# E E F F# G G#

メジャー、マイナーで、場所が半音変わる 3rd と違って、
P5th はトニック(ルート)から見て、いつも同じ場所にあります。

「じゃあ練習しなくてもいいんじゃない」と思うかも知れませんが、

さて、以前の回でも簡単に解説しましたが、これまで何気なく使ってきた、『ルート』と『トニック』の意味を再確認しておきましょう。

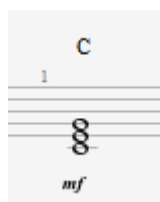
まず『ルート』ですが、これは、コードについて考えている時の“基準(根音)となる音”の事を指します。

「ルート(root)」＝根、根本、根っこ

と意味するように、

コードを構成する時、基本的に(事実上)一番低い、そのコードの土台とする音の事を『ルート』または『ルート音(根音)』と呼びます。

そのルート音の上に、だんだんと音が乗っかっていくワケです。



←Cコード

ルート音Cの上に、音が積み重なっている。(乗っかっている)

なので、Cのコードならルート音はC、
B♭のコードならルート音はB♭
Amのコードならルート音はA
F#mのコードならルート音はF#

と、こういうことですね。

次に『トニック』について。

こちらはスケール(やkey)の観点から見たとき、そのスケールの基準となる(基準に設定する)、第1音目の音のコトです。

『トニック』の訳は『主音(しゅおん)』でしたね。

要するに、そのスケールの『主』となる音の事を、『トニック』と呼ぶのです。

※keyについて考える時の『トニック』についてはまた後ほど。

Cメジャーペンタトニックスケールだったら、
C音が主音なので、トニックはC音。

Aマイナースケールならば、
A音が主音なので、トニックはA音。

と単純にこういうことです。

で、今回の譜例の解説では、“トニック(ルート)の位置から見て～”
と、ややこしい解説の仕方をしてはいますが、コレにはワケがあります。

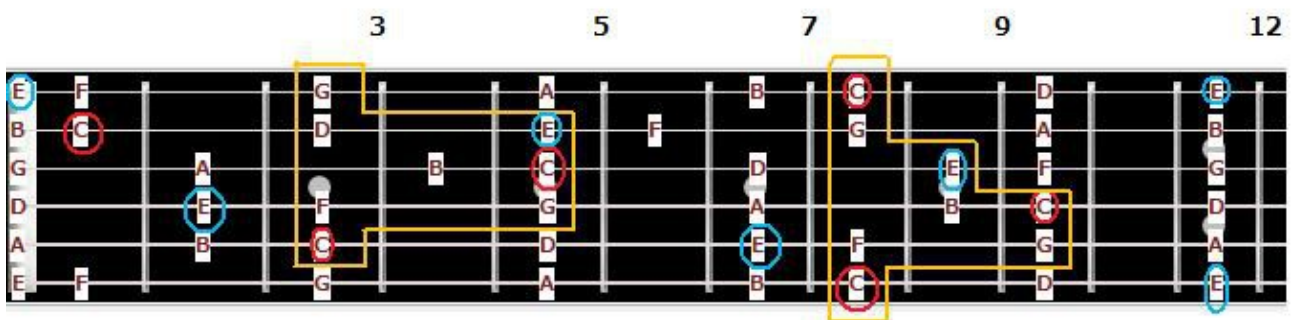
前回、今回と、3rdと5thの音の把握を行いました。

これを考える時、例に出した指板図の上で、

黄色の枠で囲った、Cコード的な観点から見るならば、C音は『ルート音』。

C音を主音(トニック)とした、C音スタートのスケール的な観点から見るならば、
C音は『トニック』。

※指板図に出ている音、“CDEFGAB”は「Cメジャースケール」の構成音。
これも今後詳しくやっていきます。



なので、“トニック(ルート)の位置から見て～”などと言った、
コードとスケールの、どちらの観点からも見ることの出来る説明の仕方をしてはいます。

これは、練習をするときはどちらで考えても良いです。

ただ、『ルート』と『トニック』の、
意味と使い分け方は覚えておいてくださいね。

それでは、今回は以上になります。

ちょっとややこしい話しをしたので、実戦譜例はありません。

ルートとトニックの違いは、大事な概念なので、
繰り返し読んでしっかり理解しておきましょう。

ありがとうございました。

大沼